中島敦

のは、の末年、若くして名をに連ね、ついでにせられたが、性、、自らむところる厚く、に甘んずるをしとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、、にし、人と交わりを絶って、ひたすら詩作にった。となって長くをな大官の前にするよりは、詩家としての名を死後百年にそうとしたのである。しかし、文名は容易にがらず、生活は日をうて苦しくなる。はようやくに駆られてきた。このからそのもとなり、肉落ちで、眼光のみらにとして、かつてにした頃の豊頬の美少年のは、どこに求めようもない。数年の後、にえず、妻子の衣食のためにに節をして、再び東へき、一地方の職をずることになった。一方、これは、己のに半ば絶望したためでもある。かつてのはにか高位に進み、が昔、としてにもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年のの自尊心をいかに傷つけたかは、想像に難くない。はとして楽しまず、の性はいよいよえ難くなった。

－25－